

令和8年度第1回市民活動センター評価委員会 摘録

日時：令和8年6月22日（月）午後1時30分～午後4時30分

場所：市民活動総合センター ミーティングルーム

出席者：

（委員、敬称略）東郷 寛（近畿大学経営学部教授）＜委員長＞
杉原 恵（一般社団法人 my turn 代表理事）
鈴木 ちよ（総合地球環境学研究所 特任専門職員）
住友 聖子（市民公募委員）
山田 洋平（公認会計士）

（事務局）京都市文化市民局地域自治推進室

室長：馬場 保行
市民参加・協働支援課長：小林 寛
担当係長：別所 隆男
担当：松島 未来、岩田 朝子

傍聴者：5名

取材者：なし

議 事：京都市市民活動センター令和7年度事業の報告

京都市市民活動総合センター第6期指定管理者募集要項等の確認

開催概要

1 開 会

2 議 事

(1) 京都市市民活動センター令和7年度事業の報告

市民活動センター*の指定管理者が、令和7年度に実施した事業についてプレゼンテーションを行い、事前に提出された事業報告書も踏まえ、委員から質疑を行った。

*市民活動総合センター及び5つのいきいき市民活動センター

＜市民活動総合センター＞

（東郷委員長）

ハラスメントの事案が発生したが、再発防止策として、問題が大きくなる前にイエローカードを出すような、事前の対応策については検討しているか。

（しみセン）

今後は役員を含めたハラスメント防止研修を行う。ハラスメントの現場では、「この状況が本当にハラスメントに当たるのか」「業務上の注意の程度で収まるものなのか」と周囲の判断が難しい状況がありえる。そういう点については、「傍観者防止のためのハラスメント研修」を実施予定。具体的な内容については未定であるが、どのようにハラスメントを止められるか、介入できるかという視点での研修を考える。

(住友委員)

資料には、「knocks! horikawa」の名前がよく出てくる。講座等されているとのことであるが、「knocks! horikawa」は子どもや若者、若い親世代が利用しているイメージである。成果には「20代、40代の利用が多く、しみセンと『knocks! horikawa』の連携により新たな利用者層へのアプローチができた」とある。この連携により、しみセンの方に来られる方が増えたなどの効果はあるか。

(しみセン)

「knocks! horikawa」については、相談会や交流会を機に来られるというより、「knocks! horikawa」の店主さんや、交流会・相談会に参加された方が、別の団体に「そんな悩みを持っているのなら、しみセンに行ってみたら」と紹介してくれて、しみセンに来たという団体さんが増えている印象である。

<伏見いきいき市民活動センター>

(杉原委員)

マッチングプロジェクトが非常に興味深かった。これこそ地域の団体や活動されている方に必要とされているものだと強く感じた。センターとしては、密にコミュニケーションを取り、一緒に育てていく、広げていくということをしていると思う。しかし、人的なリソースについて、今後、センターに対して「もっとフォローしてほしい」「間に入ってほしい」「一緒に考えてほしい」といった相談が増えていくことを想定した時、どれだけそこに時間を割いてやっていけるのか、体制など含め、どのようにしていく予定か。

(伏見いきセン)

御質問のとおり、昨年度に初めて50件ほど直接面と向かって広報活動をし、時間がかかっていた。今年度以降、広報については実際に足を運ぶ方向ではなく、データを活用したい。依頼があった場合は、3人体制で、できる範囲で実施したい。

昨年度は社会福祉協議会の方が直接繋いでくれた事案もあり、今後も社会福祉協議会との連携ができればより良い対応ができるのではないかと考えている。

(鈴木委員)

マッチングプロジェクトについて、15件相談があった中で3件が不成立であるが、どのようなものだったのか情報共有いただきたい。

(伏見いきセン)

3件のうち2件は、利用団体側の人数・日程の調整が難しかったもの。残り1件は、謝礼の支払いが必要という案件であったが、相手側との金額調整が折り合わなかったもの。団体側から、地域活動の方と普段関わりがなかったため事情を初めて知ったという声があった。同団体は、今年度については謝礼不要として再度調整している。

<醍醐いきいき市民活動センター>

(鈴木委員)

秋祭りの750人やオープンデーの1,200人など、圧倒的に集客力が高い。こういった単発のイベントの参加者を、貸館利用や継続的な利用に結びつけるための工夫や手立てを

どのようにしているのか伺いたい。

(醍醐いきセン)

事業報告書の情報発信に掲載したが、これまで大きめのリーフレットであったものを、デザインやサイズを一新し、持ち運びやすいコンパクトなものに変更した。イベント時に、チラシと共に配布しており、利用促進になればと考えている。

(東郷委員長)

常勤、非常勤含めて体制の変更などはあるのか。また、大規模なイベントを開催しているが、特定の職員に負担がかかるようなことはないか。

(醍醐いきセン)

メンバー構成は変更がないが、職員全員が対応できるよう体制を整えている。大規模なイベント時も、負担を軽減し人手がかからないよう努めている。イベントでは、センターを運営する者と外で企画に関わる者とで役割分担している。

(事務局)

アクセス面で集客が大変だと聞いているが、「秋祭り」の参加人数が750人と非常に多い。来場者数を増やすために、どのような工夫をされているのか。

(醍醐いきセン)

普段は人が少ない場所であるが、今回が3年目ということで、「そろそろ祭りだな」と思っただけであり、リピーターも多い。また、当センター以上に、大学や高齢者施設などの参加団体が自身の施設利用者に広報される場合もある。上鳥羽南部や上鳥羽北部いきセンにも参加いただいております、相乗効果でいつもより多くの方が来てくださった。参加団体が実施するお祭り等にも出展しており、それぞれのお客さんがついてきてくれている。

(東郷委員長)

今後、どのような属性の方が来場されているのか、内訳等があるとありがたい。

(醍醐いきセン)

どのような地域から来られているのか等、調査したい。

<吉祥院いきいき市民活動センター>

(山田委員)

特徴的な点として、ふれあいジャンボリー自走化のプロジェクトにすごく勢いを感じた。自走化となると大変であるが、当初から4年間で自立してもらうという方針であったのか。自立化を拒否する団体はいなかったのか伺いたい。また、自走化後も継続的に同団体に関わり続けるのか。

(吉祥院いきセン)

4年間かけて会議を重ね、自立に向けて進めたものであり、拒否はされていない。3年目まではこちらの思いがなかなか伝わらず大変であったが、最終の1年でようやく皆が気づき、積極的になったと思う。今後はPTAや地域の防犯委員の方々が主となって活動することになるが、当センターとしてもこれまでのスキルを活かして補佐していきたいと考えている。

(鈴木委員)

ジャンボリーについて、3年間の積み重ねの中で、自分たちにとってのやる意義を理解し、そこから急に加速していったのだと感じる。それまでの大変な努力は想像に難くない。庭園

も整備され、親子連れも来るようになった。親子クッキングなど、知名度や稼働率が上がっていく好循環が起こりそうな予感がする。

六斎念仏の世代交代について質問する。若手に世代交代するという偉業を達成したが、今後も若手が引継いでくれるような見込みはあるのか。

(吉祥院いきセン)

元々六斎念仏を見ていた人が、今は若手として参加している。獅子舞も簡単ではないため、何度も練習を重ねていた。簡単には継承できないが、「子供六斎」という団体もあるため、子どものうちから総合学習などを通じて、次の世代へと継承できるよう小学生の頃から意識付けしている。

<上鳥羽南部いきいき市民活動センター>

(鈴木委員)

「いきセンのある地域を知る」事業については、地域の歴史や文化的な部分を深掘りし、地図を媒介としている点が、若手の研究者にとって非常に良い機会になるであろうし、参加された住民の皆さんの満足度からも、非常に意味のある事業であると感じた。今後もこのような事業が実施されていけば、いきセンとしての意義や社会的な意味が出てくるだろうと感じた。

質問であるが、サロンや貸館の利用件数・人数が上向きであると伺った。そのような中でも会議室の利用について、第1会議室に利用が偏っているとのことであるが、第3会議室のレイアウトを変えた効果はあったのか。利用者からは使いやすくなったとの声があるようだが。

(上鳥羽南部いきセン)

第2会議室については、そこまで増えてはいないが、ソファから机に換えたことで今までより広いスペースが作れたため、活性化事業で麻雀をされている方が使われるようになった。加えて、楽器利用も増えている。ジモティーに楽器利用ができると掲載しているが、音楽利用が増えすぎると、近隣からの苦情が出ないかが懸念点である。

(東郷委員長)

事業報告書記載の写真を見る限り、参加されている方の年齢層が高いと感じる。こいのぼりの事業において、小学校で実施しているようだが、子どもは参加していないのか。このような取組を通じて、保護者の利用も含めた貸館利用の増加につながるような相乗効果が生まれることを期待したい。

(上鳥羽南部いきセン)

掲載した写真は、小学校からの要請で放課後に実施した際のもので子どもが映っていないものとなってしまった。なお、今年度に入ってから子どもたちが参加している。

(杉原委員)

「地域を知る」事業では、講師が20代と若い。若手世代、ミドル層までの人々を取り込むには、このような人たちに積極的に関わってもらうことが重要。講師の周りにいる人たちも含め、一度センターに来てもらい、それらの人たちとセンターの課題なども話すことでニーズを拾い、また外の視点から見えることを教えてもらうこともできるのではないかな。このような若手の人たちに意図的に入ってきてもらう仕組みは非常に良いと感じた。待つだけで

は厳しい部分があるため、積極的なアプローチが必要なのだと感じた。今後に期待したい。

<上鳥羽北部いきいき市民活動センター>

(東郷委員長)

センターの隣に児童館があるが、今後、児童館の連携など、それらの方向性で新たに取り組まれることはあるか。

(上鳥羽北部いきセン)

同じ団体で中唐戸児童館を運営しており、子どもたちも絡めながら、今後もエコ活動は続けて行くが、今後はエコ・環境以外のことにも取り組んでいく予定で、今年度以降は地域との関わりを深めたいと考えている。地域の介護施設等から、「何か地域住民のためにできることはないか」という相談があり、一緒にイベントなどを計画しようと考えている。社会福祉協議会や地域包括支援センターからの協力も得られそうであるため、地域課題解決の連携支援事業として、定期的にミーティングなどを行いながら、イベントの共催をしていきたい。地域の企業や事務所などの活性化を目指して取り組んでいくような形で、事業の展開を新しくしていきたいと考えている。

(2) 京都市市民活動総合センター第6期指定管理者募集要項等の確認

「京都市市民活動センター第6期指定管理者募集要項」(案)について、事務局から説明を行い、委員から質疑を行った。

募集要項を修正する意見はなかったため、今後、事務局において手続を進めることとなった。なお、募集要項については、委員から次の意見が述べられた。

(山田委員)

専門職員については、京都市が「専門性あり」と認定するということか。それとも形式があるのか。

(事務局)

特別な資格が必須というわけではない。応募があった段階で確認し、適切でないと判断すれば専門職員とは認めない。

(住友委員)

委員への接触禁止について質問する。接触を避けられない、あるいは関係性がある場合はどうか。

(事務局)

そのような関係性もあるだろう。委員以外が知り得ないような、指定管理の内容を聞いてきたり、「募集に応募するから便宜を図ってほしい」といった依頼をしたりすることは完全に許されない。

関係性的に避けられない場合、当該委員が審査から外れるという可能性はある。その際は、具体的な状況を相談してほしい。委員長とも相談する。

(以上)